

東京と金沢の間

西村京太郎

Kyotaro Nishimura

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

目次

第一章	終戦記念日の死	7
第二章	決戦の思想	33
第三章	マニラ	57
第四章	命の担保	82
第五章	特攻神話	109
第六章	現地主義	137
第七章	東京の死と金沢の生	160

東京と金沢の間

第一章 終戦記念日の死

1

その日は終戦記念日、八月十五日だった。東京の下町、江東区こうとうにある七階建てのマンションの一室で、一人の老人が、死んでいるのが発見された。

老人の名前は小暮義男こぐれよしおといい、十年ほど前からそのマンションに住んでいたが、当時からずっと一人で、老人を訪ねてくる者は少なかったという。

家主は六十歳の未亡人で、その前日の夜、小暮義男から、

「明日の午後は、どうしても、行かなくてはならないところがあるので、大変申し訳ないが、昼前には、部屋のベルを鳴らして起こしてくださいませんかね？ よろしくお願いします」

と、いわれていた。

大家の青木康子やすこは、その約束を覚えていて、昼少し前に、小暮義男の五〇一号室、五階の角部屋を訪れた。

しかし、何度ベルを鳴らしても、中から返事がなく、といって、カギがかかっている様子もなかったので、康子が、

「小暮さん、時間ですよ。まだお休みですか？もうすぐ約束のお昼になりますよ」

と、声をかけながら中に入り、1LDKの部

屋の中を、覗いてみた。

すると、ベッドの近くにワイシャツを着て、うつ伏せで倒れている小暮義男を、発見したのである。

ビックリして駆け寄ると、小暮義男は、既に、呼吸をしてないようだったので、青木康子は、慌てて一〇番した。

十五分ほどして、地元の警察が駆けつけたが、死体の状況を見るなり、殺人事件と断定して、今度は警視庁捜査一課の刑事たちが、パトカーでやって来た。

今回、この殺人事件を、担当することになったのは、十津川警部と彼の部下、亀井刑事たちである。

十津川たちが調べた結果、二、三時間前に、何者かが素手で、被害者の首を絞めて殺したも

のと考えられた。

しかし、被害者に抵抗した様子はなく、部屋も荒らされてはいなかった。

「それにしても、何もありませんね。いかにも、一人暮らしの老人らしい、寂しい部屋ですよ」

亀井刑事が、部屋を見回しながら、十津川に、いった。こんな部屋を見ると、亀井の頭を横切るのは「孤独死」という言葉である。

部屋の隅にベッドが置かれ、そのほかにあるのは、中古のテレビと洋ダンス、せいぜい、金目のものといえば、そのくらいである。ほかには大きなものはほとんどない。何とも殺風景な部屋である。

「いや、仏壇は立派ですよ。この部屋の中ではいちばん目立っています」

と、北条早苗刑事が、いった。

たしかに、かなり大きな仏壇が、部屋の隅に置かれていた。小さな部屋に比べると、不釣合いいっててもいいくらいの立派な仏壇だった。

その仏壇には、古びた、一枚の写真が飾ってあった。

それを、十津川は、手に取ってみた。文庫本くらいの大きさの白黒の写真である。そこには、軍服姿の二人の若い男が写っていた。その二人の向こうに写っているのは、どうやら、戦争中に使われたプロペラ機で、軍用機らしい。

さらに観察を続けると、写っている二人の兵士の片方は、どうやら、殺されたこの部屋の主、小暮義男のように思えてきた。二十代に見える若い兵士だが、その風貌が、死体となってベッドのそばに横たわっている老人とよく似ているのである。

とすると、七十年前前の、若かりし日の小暮の、写真なのだろうか？

十津川は、遺体を司法解剖のために東大病院に送る手配をした後、家主の青木康子から話を聞くことにした。

「小暮さんは、いつ頃からこの部屋に住んでいたんですか？」

「たしか、十年前からです。五、六回、契約を更改していますから」

「見たところ、小暮義男さんは、かなり年輩の方ですよ？ 小暮さんの年齢を、ご存じですか？」

「ええ、今年で、九十三歳になるとお聞きしています。でも、体は、丈夫で、この歳になってもどこも悪いところはないといわれて、とてもお元気でしたよ」

「十年間ずっと、一人で、ここに住んでいるんですか？」

「ええ、そうです」

「家族とか友人が訪ねてくることは、ありませんでしたか？」

「いいえ、そういうことも、ほとんどありませんでしたね。お友だちや家族があまり訪ねてこない方でしたから」

と、康子が、いう。

「それで、小暮義男さんは、普段は、何をなさっていたんでしょうか？ 年齢が年齢ですから、仕事はなさっていなかったんじゃないかと思うのですが」

「もちろん、今は、無職で、何もしていらっしやらなかったようですよ。年金が出るので、それで、暮らしていると、おっしゃったことが

ありましたし、毎朝、仕事に出かけていくということも、ありませんでしたから」

「賃貸契約書があれば、見せていただけませんか？」

十津川が、いうと、康子が、去年、更改した時の契約書を、持ってきて見せてくれた。

保証人の名前のところには、小暮俊介しゅんすけとあり、この男の住所は、石川県の金沢市内になっていた。

だが、電話番号は、書かれていなかった。

「ここに書かれている保証人の、小暮俊介という人ですが、小暮義男さんの、息子さんですか？」

十津川が、きいた。

「さあ、どうなのでしょう？ 私には分かりません。何しろ、十年間、小暮俊介という保証人

の方が、訪ねてきたことはない、思うのですよ。会った記憶がありませんから。いや、正確に言えば、一度だけ、小暮さんが、ここに引越してきた時、保証人の小暮俊介さんも一緒に来たことがありますよ。その時は、まだ主人が存命でしたので、主人が会ったと思いますね。

私は、お会いしていません」

「なるほど。それでは、保証人の方に、連絡を取ったことはありませんか？」

「いいえ、それも、ありません。こちらから、この方に連絡を取ったことも、向こうから連絡があったことも一度もありませんね。部屋代のことと問題が起きたことはございませんので」

家主の青木康子がいるのである。

次に、十津川は、金沢警察署に連絡をとり、金沢市内の住所になっている小暮俊介の電話番号

号を、きいた。

家のほうの電話番号は、金沢警察署が調べて教えてくれたが、携帯電話の番号は分からないという。

十津川は、金沢市内の、電話番号にかけてみた。

十津川が、電話をかけると、呼び出し音が三回ほど鳴ってから、

「小暮でございますが」

と、女の声が、答えた。

「小暮義男さんという、今年九十三歳の男性ですが、ご存じですか？」

十津川が、きく。

「ええ、小暮義男は私の義理の父ですが、どうかしましたか？」

「小暮義男さんが今日、東京江東区のマンショ

ンで、亡くなりました。身元を確認したので、どなたかすぐに、東京の江東警察署まで来ていただいせんか？」

と、頼んで、電話を切った。

問題は、仏壇に飾ってあった、写真である。

友人に日本の軍隊に詳しい男がいるので、その男に写真を見せると、

「この服装は、たしか、海軍の航空隊の中尉じゃないかね」

と、いい、続けて、

「この二人の向こうに写っているのは、海軍のゼロ戦だよ。有名な機体だから間違いないと思うよ」

と、教えてくれた。

そうすると今回殺されたのは、どうやら戦争中の、海軍中尉らしい。

しかし、なぜ、こんな古い写真を、仏壇に飾っておいたのだろうか？

夜、被害者、小暮義男の、息子夫婦が、江東警察署にやって来た。北陸新幹線が、開業すれば、金沢と東京は、二時間半で結ばれる。

夫婦は共に、五十代である。

十津川は、小暮俊介、美津子みつこに、亀井と一緒に、話を聞いた。

「小暮義男さんは、十年前から江東区内のマンションに一人で暮らしていたようですが、どうして、お父さんと一緒に、住まなかったんですか？」

と、十津川が、きいた。

「オヤジは、もう、かなりの高齢ですからね。一人暮らしは、心配でしたから、わざわざ東京に行くことはないじゃないかと、何度もいった

んです。でも、オヤジは昔から、頑固な人ですから、一人のほうが気楽でいいといって、どうしても、私たちのいうことを、聞かなかったんです。それでずっと、東京で、一人暮らしでした」

と、小暮俊介が、いった。

「小暮義男さんは、今まで、どんな仕事をなさっていたんですか？」

「戦争中は、海軍です。航空です。戦後は金沢が、郷里なので、金沢に戻ってきて、今のJR、かつての、国鉄の金沢駅で働いていましたが、定年になって退職をした後は、年金暮らしをしていました。しかし、どういうわけか、金沢から東京に出ていってしまいました」

「気楽だから、というだけでですか？」

「それ以上の理由は、話してくれなかったので、

私にも、分かりません」

「失礼ですが、あなたは今、どういうお仕事をなさっているんですか？」

と、亀井が横からきいた。

「オヤジと一緒に、現在、金沢駅で、助役をやっています」

と、小暮が、いった。

十津川は、例の仏壇に、飾ってあった写真を、息子の小暮に、見せて、

「この写真ですが、ご覧になったことはありますか？」

と、きいた。

小暮俊介は、写真を手に取って、見ていたが、
「ええ、見たことが、あります。たしか、十年前、オヤジが、東京のマンションを借りる時、私が保証人に、なったので、その部屋を見に行

ったことがあるんですよ。その時に、新しい仏壇が、買ってあつて、そこに、この写真が飾ってありました。今でもよく覚えています」

「亡くなった、小暮義男さんは、どうして、この写真を、仏壇に、飾っておいたんでしょうか？ 理由^{わけ}をお聞きになつていますか？」

「いえ、全く分かりません。戦争中、海軍の航空隊にいたことは知っていましたが、その頃の話、オヤジから聞いたことがないんですよ。どうして、私に戦争中の話をしなかったのか、その理由も、全く、分かりません」

小暮がいう。

「小暮義男さんは、東京の、マンションにいた時、ずっと一人で、住んでいたようですが、小暮さんの奥さん、あなたから見ればお母さんですが、どうして一緒ではなかったんですか？」

もしかすると、その頃、すでに、お亡くなりになつたんですか？」

「ええ、オヤジが東京に出ていく少し前に、亡くなりました。オフクロはその時七十五歳でした」

「お母さんから、この写真について、話を聞いたことは、ありませんか？」

「一度だけ聞いたことがあります。おやじはこの写真は、九州の基地で撮つたと、母にいったそうです。ただそれ以上のことは、話してくれなかったといっていました。オヤジは、戦争の話は、母にも話さなかったみたいです」

「小暮さんは、何者かに、マンションの部屋の中で、扼殺^{やくさつ}されました。お父さんが、誰かに恨まれているというような話を、聞いたことはありませんか？」

亀井が、きく。

「いや、聞いていません。何回も申し上げますが、オヤジは、昔から頑固な人で、その上、口が重かったので、肝心なことは、ほとんど何も、しゃべってくれなかったんですよ。ですから、息子の私でさえも、オヤジのことは、ほとんど、何も知らないのです。ただ、金沢に住んでいたときは、毎年八月十五日になると、東京に行ってたんです。靖国神社に参拝していたようです」

と、小暮が、肩をすくめた。

一緒に来た妻の小暮美津子が、

「たしかに、お義父^とさんは、頑固で厳しい人でした。けれども、他人に、恨まれるようなことをする人では、なかったと思うのです。ですから、今度の事件は、空き巣にでも、入ってきた

人間が、たまたま、お義父さんと、顔を合わせてしまつて、それで、殺されたのではないでしょうか？ 私には、そう思えて仕方がないので、刑事さんに思い当たることはないかと聞かれても、私にも、お義父さんが誰かに、恨まれていたとは、とても、思えません」

と、いう。

「たしかに、空き巣に入つた人間が見つかつて、その家の人を、殺してしまうというのは、よくある話ですが、今回の場合は、違いますね」

と、十津川が、いった。

「どうしてですか？」

と、小暮俊介がきく。

「空き巣に入つた犯人と、バツタリ顔を合わせて、それで、首を絞められたとすると、衣服の乱れや、家具が倒れるなど、抵抗した痕跡が、

あるものです。しかし、小暮さんは、おとなしく殺されたように見えるのです。今回の事件は、単なる物盗りの、犯行ではなく、小暮さんは、犯人と顔見知りだった可能性が強いと、われわれは考えているのです」

と、十津川が、いった。

2

翌日には、江東警察署に、捜査本部が設置された。

捜査を続けていく中で、十津川は、仏壇に置かれていた古い写真に、あくまでもこだわった。あの写真の舞台は、九州の特攻基地だという。そうになると、あの仏壇に置いてあった写真は、七十年以上も前に、九州の特攻基地で撮られた

ものだということになってくる。

小暮義男は、そんな古い写真を、どうして、仏壇に、飾っていたのだろうか？

それも、中古マンションの、ほかには何もない殺風景な部屋に、不釣り合いなほど大きくて立派な仏壇を置いて、その中に飾ってあったのである。1LDKに置かれた調度品の中で、仏壇だけがやたらに立派で、十年前に買った物である。

だとすれば、飾られていた写真は、今回の事件に関係しているのではないのかと、十津川は、考える。

十津川はもう一度、太平洋戦争に詳しい友人、中央新聞の、社会部で働く田島に、写真のことを、聞いてみることにした。

「この写真について昨日は、君にいろいろと教

えてもらって、大変に参考になったよ。その時後ろに写っているのはゼロ戦で、服装から見て海軍航空隊の中尉だと、君はいったね？」

「ああ、その通りだ」

「それ以外に、この写真から、分かることはないかな？」

と、十津川が、きいた。

「そうだな」

と、田島は、しばらく、写真を見つめていたが、

「兵士の後ろに写っているゼロ戦だが、これは、間違いなく六二型だ。従って太平洋戦争でも、かなり末期の写真だと考えて間違いないと思う」

「そう考える根拠を教えてください」

「ゼロ戦という戦闘機は、最初、一一型が作ら

れてから少しずつ改良されていって、写真に写っている六二型のゼロ戦は、終戦前年の、昭和十九年に生産されたんだ。だから、この写真は、戦争末期に、撮られたものだったんだ」

「この写真が撮られた飛行場だが、九州の特攻基地だという人がいるんだが、君はどう思う？」

「たしかに、南九州の飛行場かもしれない」

と、いった。

「どうして？」

「二人の服装は、夏服だ。とすれば昭和二十年の夏と考えられる。その頃は、多くの特攻機が、沖縄に向かって、飛び立っていったんだ。南九州の特攻基地からね。それに、この写真だが、素人が撮ったものではなくて、新聞社の、カメラマンが撮った可能性が強い」

「どうして、そんなことまで分かるんだ？」

「当時、素人が撮った写真は、ほとんど新聞などに使われなかった。特攻隊を撮ったものと思われるこれは新聞に載せるために、プロのカメラマンが、撮ったものだよ。戦争末期は、全て、戦意高揚に役立つような写真ばかりを新聞に載せていたから、どうしても、こんな無理に笑ったような写真になってしまったんだよ。もちろん、この写真が、その中の一枚だと、断定はできないがね」

田島は、いった。

そこで、十津川は、田島の言葉を確認したくて、国会図書館に行き、戦争中の新聞に載った写真を、全部見てみることにした。

十津川は西本と日下くさかの二人を連れて、国会図書館に行き、戦争中の新聞を見せてもらった。

戦争末期になると、用紙の不足からか、たった一枚だけの、新聞が発行され、夕刊もなくなっていた。

ゼロ戦六二型が作られた年代が分かっていたこともあって、三人で手分けして調べると、探していた記事は、意外に簡単に見つかった。

同じ写真が、戦争末期のB新聞に、載っていたのだ。

〈今日も若き神鷲が行く。勝利は、われにあり〉

という勇ましい見出しがついている。

そこには、仏壇にあった写真と全く同じものが、載っていた。

次に、十津川はひとりで、その記事が載っていたB新聞社を、訪ねた。

応対してくれた記者に、問題の写真を見せて、十津川は、写真が、いつ頃、どこの飛行場で撮られた写真なのか。そして、小暮義男と一緒に写っている若い飛行士の名前を知りたいといった。

問題の新聞は、昭和二十年五月十一日の、朝刊だった。

写真が写されたのは、前日の五月十日、南九州の海軍航空基地とわかった。二人一緒に写っているのは小暮義男、二十三歳、海軍中尉、若いほうは、篠原恵一、兵曹長、二十歳と簡単に判明した。

さらに、B新聞で調べてもらうと、いろいろと詳しいことが分かってきた。

この時、病死した司令に代った少佐が、翌日の特攻に出撃する人間を、選定していたが、小

暮中尉は、その補佐をするように、命令されていた。

とすれば、この写真は、小暮たちが、自分の部下の中から、篠原という特攻隊員を選んだ後の写真、という可能性がある。

この後、篠原兵曹長を含めた、三機が特攻で出撃し、小暮中尉は、直掩機ちよくえんきとして篠原たちを援護し、戦果を確認してから帰ってくる役目を与えられていた。

このあと、十津川がやったことは、特攻に関する本に、出来るだけ目を通すことだった。

南九州の特攻基地のことを書いた本は、何十冊も出ている。

調べていくと、その中に、問題の航空基地のことを書いたものもあった。小暮義男中尉という名前が、出てくる箇所もあった。

同じB新聞の記者が、その基地に泊り込んでの「基地日記」である。

へこの基地で、マニラの海軍基地から、着任間もない小暮義男中尉は、部下の操縦士たちから兄のように慕われていた。航空隊司令が病死してから、小暮中尉は毎日、次の日の特攻隊員を決める役目を、補佐とはいえ、背負わされていた。

それでも、小暮中尉は、
『待っていてくれ。私もすぐ、君たちの後に続く』

というのが、口ぐせだった。

小暮中尉という人は、温厚な性格だったが、一回だけ、激怒して上官を殴ってしまったことがあるといわれている。

レイテ決戦の時、マニラの基地から何機かの特攻機が、レイテ湾に、停泊していたアメリカ機動部隊の艦船に向かって出撃していった。その時、小暮中尉は、特攻機の直掩機を操縦していた。敵戦闘機の攻撃から、特攻機を守り、戦果を見届ける、役目である。

基地に帰ってから、部下の兵曹長がレイテ湾に停泊している巡洋艦に、体当たりをして、これを撃沈したと、小暮中尉が飛行長に報告したところ、

『一万トンある頑丈な、アメリカの巡洋艦が、たった一機の零戦が突っ込んだくらいで簡単に沈むはずがない。もっと正直に、報告しろ』

と、飛行長が、眉を寄せたのである。

日頃、温厚な小暮中尉も、カッとして、
『若い操縦士が、自らの命をかけて、突っ込ん

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。